

魔力の協力という名の下、ショゴスと呼ばれた化け物が残した粘液に塗れた(まみれた)部屋で繰り広げられた饗宴は、こうして終わりを告げた。

貴方は、黒い仔山羊と名乗った少女の慎ましい胸から滴つた甘く香る乳(ちち)を飲み……それにようて更に精を貪られながらも、どうにか体を動かすまでに回復させていた。体の内側から、ごつそりと“ナニか”を吸い取られたという倦怠感(けんたいかん)を感じながらも身を起こし、いつの間にか再び服を着ていた少女が貴方に向き直る。

仔山羊

「さて、どうにか最低限……あの下等な奉仕種族に身の程を教えてやる程度の力は手に入りました。協力、感謝ですよ。マスター？」

それで、ですけど……奴が何処に行つたか分かりますか？」

貴方ならば知つてゐるだろうと言わんばかりに、少女が問いかけてくる。だが、この廃屋に来たばかりの貴方には当然そんな心当たりはなく、首を横に振るしかなかつた。

仔山羊

「え?……マスターなのに、心当たりがないのですか?

めええ……貴方が知らなければ、他に分かる人間などいないと思うのですが。

まあ、襲われていた所を見るに暴走していたようですし……仕方ないのかもしれないですね。うん、それなら探すしかないですね！」

少女は貴方の返答に、訝しむ(いぶかしむ)ように首を捻つたが、何やら一人で納得すると率先しがれ部屋を出て行こうとする。

あまりに少女が平然と部屋を出ようとするため、貴方は慌てて彼女を止めようには手を伸ばした。

——あの、化け物を探す気なのか!?放つておいて、逃げるべきじゃないのか?!

そう必死に言葉を募る(つのる)貴方に、少女は不思議そうに、更に首を傾げる。

仔山羊

「はい?……何を言つてゐるんですか、マスター?

私とアレを戦わせ、どちらが優秀かを測りたいと願つたのはマスターではないですか。

傲慢な願いとは思いますが、その嘆願が適つたからには私はそれをしなくてはお母様の下に帰れないです!

……ショゴスに襲われて臆病風に吹かれたのかもしれません、私を招来(しようらい)させた以上、戦わないという選択肢は最早ありませんよ! さあ、キリキリ探しますよ、マスター!!」

《どんどんどん……ぬちや》
(粘液質な床を歩く音)

少女はそう言い、ずんずんと粘液塗れの床を踏みしめるようにして部屋の外へと出て行つてしまふ。

貴方はあの化け物を思い出し恐怖に体を震わせたが……また襲われた時に彼女がいなければ、

今度こそ命はないのだ。
何か少女に大きな誤解をされているのを感じながらも、貴方は慌てて後を追いかけるしかなかつた……。

仔山羊

「めえええ？」
この部屋は特に粘液が酷いですね、食い残しもあるようですし……」」を巣にしてたのは間違いなさそうですが……。
いなさそうですね……天井に張り付いてるといった感じもないですし、めえー……？」

後ろから追いつくと、貴方が最初にあのショゴスと呼ばれる化け物に遭遇した部屋を少女は見回していた。

部屋は貴方が襲われた時から特に変化はないようで、相変わらず溶けかけた家具や。かつては動物……或いは人であったのであろう。マジマジと見れば見る程に気分が悪くなる、粘液に浸つた肉片や何処の部位とも知れぬ残骸が転がっているだけである。

仔山羊

「うーん……マスター、奴が何処に行つたか検討はつきませんか？
私はどうにも人間の巣の事は、良く分からないです。
グチャグチャと物があつて、何が変なのがさっぱりで……」

少女の問いに、貴方も改めて部屋の中で何か目星になりそうな物がないかを見渡す。
やはり特に変化らしいものは感じなかつたが……ふと、最初にこの部屋に入った扉が閉まつたままなのが目に留まつた。

あの扉は確かに、化け物と出会つたショックで、閉めるのもままならず、そのまま開いたままにはいなかつたか？
貴方が訝しむ（いぶかしむ）ように閉まつてある扉に視線を向けていると、黒い少女もまたその視線を追うように扉に目を向けた。

仔山羊

「めえ？……マスター？
その木の板がどうかしました……ん？」

2人の視線に晒された扉に突如変化が起きる。
木製の茶褐色を示していた扉が突如緑色に変化を始め鋭く尖り、次の瞬間槍のように少女目掛けて凄まじい勢いで襲い掛かったのだ。

《が、ぎいんっ！！》
(槍と髪がぶつかる硬質な音)

仔山羊

「めええ……っ！
なる程……流石、競わせようとしただけあつてショゴスの特性を良く理解していますね、マス

タ
一
!

木の板に擬態して、隙を突くつもりだつたのですか……下等な生物にしては知恵の回る事です！」

少女を串刺しにせんと迫つた緑色の槍を、まるで独りでに動いたかのように彼女の髪が蠢き、絡みつき、刃物が擦(ヨス)れ合つたような硬質な音を響かせ、その暴威を食い止めた。

『アーティスト』（1970年）

「お母様の娘である私を、あまり舐めないで下さい！」
タネさえ割れてしまえば、この程……度つ！――

《てげ……でげえええ！－！？？》

（少女の髪が、緑色の髪をぶつりと千切る音）

少女が小さく吠えるように頭を捻ると、緑色の槍に絡んだ黒い髪が、山羊の蹄のような形に姿を変え、ぶちりぶちりと力任せに捻り、抉り……肉が裂ける恐ろしい音を響かせながら、絡みついだソレを引き千切る。

シヨ二ス

自身の体の一部を力任せに筆（ムシ）り取られたショゴスは、苦痛を示すかのように叫び声をあげると、扉への擬態を止め一転。そのまま廊下へとへちやりという音を残しながら、外見によらぬ俊敏な動きで逃げ出していく。

《がしゃあんっ！！》
(ショゴスが窓を突き破り逃げる音)

仔山羊

ぬ？……逃がしましたか！
めええー……知性が低い存在だと聞いていたのですが、中々どうして逃げ足は速いですね……！
こうして狙つてくる以上、放つて遠くへ逃げていくという事はないと思うんですけど

（剥ぎ取つたショコスの一部を投げ捨てる音）

千切り取った緑色の肉塊(にくかい)を投げ捨て、少女は逃がした事を悔やむように小さな呻きを洩らす。
貴方は再び繰り広げられた一瞬の攻防に咄嗟に体を動かす事が出来ず、目を白黒させ固まつていた。

べる。

仔山羊

「マスター、この調子でお願いしますです！」

どうやらアレは随分臆病なようですね……。

次は逃がさぬよう、私も気をつけてみますので、この調子で奴を追い詰めていきましょう。任せて下さいつ！」

流石はお母様の娘と言わせる、一点の曇りもない勝利をお見せしますよ！」

そう言つて、今しがた人ならざる怪異の姿を見せ付けた少女は、楽しそうに笑つてみせる。貴方は、彼女の誤解が解けてしまえば、……その暴威の向かう先が自分になるのではないか、という一抹の不安の中……その笑顔に、小さく頷いてみせるしかなかつたのであつた。

====

《バキッ……ガシヤンツ》
(扉を破壊する音)

仔山羊

「ん、一通り見て回りましたけど……もう、こ」くらいですね。

マスター、この場所だけこの木の板……扉でしたか？

ここを封鎖して、いたようですが、何か事情でもあつたのですか？

封鎖を取り除くような道具も持ち合わせてなかつたようですねけど……」

少女と共に廃屋……いや、ショゴスの巣と化していた館を再び探索した貴方は、これといった成果を見つけられずにいた。

そこで唯一……鍵が掛かつたまま開ける事の出来なかつた扉に、最後の希望を託すように乗り込む事にしたのだ。

少女に扉を破壊するようお願いすると、貴方自身がそうしたのではないのかという不思議そうな顔をされたが、そこは曖昧に笑みを浮かべて誤魔化し、足を踏み入れる事に成功した。

仔山羊

「ん……へえ。

この場所だけ他と違つて、適当に物が散らばつていないと、いうか。

ふむ……私でも分かるぐらいには、意味を持った物を置かれているんですね？

あ……あれとか、少しだけですけど、お母様の匂いがします！私の招来に関係した品なんですか？」

少女の言葉通り、鍵の掛かっていたこの部屋だけは他の荒れ果てた部屋とは違い、整理された人のいた形跡を感じる事が出来た。

ざつと見回した所、書斎であったのだろうか？

本がぎつしり詰まつた本棚や書きかけのノートやスクランプブック、机やその脇に置かれた何かの容器らしき缶。

その他、黒い山羊を模した小さな像といった用途の分からぬ品も含め、そこには確かに人が何かの目的があつて、物を整えていた痕跡が感じられた。

仔山羊

「くんくん、めええー……？」

匂いは薄いです……お母様に関係した物のようですが、魔力などは殆ど宿っていないみたいですね？」

少女は黒い山羊に関係した物に興味がそそられるのか、それ等を手に取つては匂いを嗅ぐなどし、様子を見ているようだ。そういつた怪しげな物には知識のないため、そこは彼女の気のすむままに任せ、貴方は本やノートへと目を移す。幾つかの書物は英語やドイツ語のような、読む事は出来ずとも分かる文章や専門書らしき物が多かつたが、中にはあの部屋と同じような奇妙な言葉で書かれたものもあり、詳しいことは何も分かりそうにはなかつた。

だが、一つだけ……机の上に置かれていたノート、これだけは違つた。どうやら、所有者の備忘録(びぼうろく)とでもいべきか……日記のように、その日考えた事を纏める為に使われていた書記として使われていたらしい。これだけは持ち主にとつては日常的な内容のためか日本語で書かれており、貴方にも読む事が出来るものであつた。

仔山羊

「ん……マスター? どうかしたんですか?
んん、それは何ですか? 何かぐちやぐちやと……文字ですか?
私はよく分からないですけど……」

貴方がそれに目を通そうとしているとき、横からひょいと顔を覗かせた少女もまたそのノートに目を落とした。だが、どうやら日本語……いや、言つていた通り人間の文字自体を読む事が出来ないのか、不思議そうな顔をしている。貴方は何でもないと笑つて誤魔化し、彼女から離れ、再びノートの内容へと目を向けるのであつた。